

岐阜市

# 「ICU稼働制限」「院内感染対策」 コロナ治療の現場語る



コロナ治療の最前線で取り組んでいる医療、院内感染対策などについて語る松波英幸理事長(右端)ら。岐阜市長良福光、都ホテル岐阜長良川

## 保団連がフォーラム

医療現場の課題などを議論する全国保険医団体連合会(保団連、住江憲勇会長)の第36回医療研究フォーラムが、岐阜市長良福光の都ホテル岐阜長良川などで開かれ、新型コロナウイルス

治療現場の現状などが語られた。毎年、全国の医師や歯科医師による臨床研究発表の場として開催しており、今年とは同市を主会場に講演やシンポジウムを実施。医師

ら約250人がオンラインで参加した。

新型コロナウイルスをテーマにしたシンポジウムでは、県総合医療センター(同市)感染症内科の鈴木純医師、松波総合病院(羽島郡笠松町)の松波英幸理事長が、医療現場の現状と院内感染対策などについて語った。鈴木医師は感染の第5波を振り返り、「重症患者を診る人員は限られ、ICU(集中治療室)の稼働を制限せざるを得ない時もあった」と病床が逼迫した状況を説明した。松波理事長は、ドライブスルー方式によるPCR検査など、医療スタッフの感染防止の取り組みを紹介した。

また、京都大学大学院工学研究科の藤井聡教授(リスク心理学)は「さまざまな活動の自粛によって倒産、失業、うつ病、自殺などの副作用が起きている。自粛以外の道をいち早く探る必要がある」などと警鐘を鳴らした。(山田雄大)